

糸電話の「トク」



大学宗教部長
塩谷直也
SHIOTANI Naoya

二〇二〇年、すべての授業がオンラインに切り替わった。見えない相手に向かってインターネット回線を使い、九〇分×一五回の授業を双方向で行うという気が遠くなる作業が始まった。

既視感があった。子どもの頃、糸電話で遊んだことがあるだろうか。紙コップを耳にあて消え入りそうな相手の声を聞き取り、次にそれを口にして押し付けて語るが、言葉が届いていないかどうかも不安になる遊び。オンライン授業はあれに似ていた。糸電話はしばらくすれば飽きてしまい「やっぱり直接会っておしゃべりがいいね」と言っつて片づけられた。けれど今回はそうはいかない。徹頭徹尾、特に一年生に対しては初対面にもかかわらず「糸

電話方式」で授業を行い、採点まで完了するという。

安定しない回線は途切れる。相手の反応は見えない（いや、見せてくれない）。自分の声が先方に聞こえているのか確認が持てない（手がたえが感じられない）。それはまるで、鬱蒼とした森の中に日本語を解する人が潜んでいると信じ、ひたすら九〇分言葉を送る苦行のようでもあった。

半ばあきらめるような思いで学期末を迎えた頃であったか。その「森の中」から囁く声が聞こえはじめ、何人かの学生が現れてきた。森の中からあの人この人、紙コップを片手に「授業、聞こえてましたよ。先生」と言いながら登場してくる。驚いたことに学生たちの反

応は予想以上に肯定的。

本音を言えばオンラインなど対面授業に劣るもの、とみなしていた。しかし切れそうな糸にびくびくしながら、私が糸電話をしつかり口にあて声を張り上げていたように、受け取る側も必死に紙コップを隙間なく耳にあて、小さな言葉の欠片すら丁寧に拾ってくれていたようなのだ。

追い詰められていた私は、重要な情報、神という存在を糸電話の向こう側にどうやったら伝えられるか、と必死に「糸」に思いを託していた。しかし違っていた。神は私の独占物ではない。語る側、聴く側、どちらにもいる「遍在 (omnipresence, ubiquity)」の神ではないか。

わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。

わたしは遠くからの神ではないのか。
誰かが隠れ場に身を隠したなら
わたしは彼を見つけれないと言うのかと
主は言われる。
天をも地をも、わたしは満たしているではないかと主は言われる。

(エレミヤ書二三章二二―二四節)

私のやるべきこと、それは情報を伝えることのみではない、と了解する。むしろ「天をも地をも満たしている」神に、どうやったら受講生が気づけるか、その最低限の道筋を指示することが目標と思定める。北海道から受講する学生には、その風土の中でご自身を示す聖書の神を語り、熊本の水害で避難先から受講する学生には、その避難場所にも共に寝起きするイエスを紹介していくのである。究極的に大切なのは私たちを横に繋ぐ水平の「糸」ではない。神と人を繋ぐ垂直のパイプである。そのパイプを信じる授業へと、いつも以上に力点を変えていく。すなわち「青山学院が信じてきた神は、キャンパスに来られなくても、今あなたのいるその場所においてくださる。その道案内を、聖書を通して行いますので、どうぞ手元に聖書を置いて、

ご自分で一つ一つ確認しつつ聞いてください」。

以上の意味で、送り手と受け手の両方に聖書があつたことの意味は実に大きい。そのありがたみは例年に勝るものであった。

考えてみればキリスト教信仰もオンライン教育と似ている。会えない、触れられない神と、「聖書」という電源不要のデバイスを使って双方向のコミュニケーションを行うわけだ。聖書を通して神の「授業」を聞き取り、礼拝を通して神に「質問」を送り、神は試験という名の「テスト」もくださる。必修単位を落とせば、人生には再履修もあるような気がするが、いかがか。

ただオンライン教育の課題も浮き彫りになった。その最大のものが、「移動」の喪失だろう。すべての授業を自宅で受けられる。キャンパスに行く機会、体を移動させる必然を学生も教師も失った。それは私たちの成熟を阻害しかねない。なぜなら人は成長に従って場所を移動する。いや場所の移動が、成長への刺激として作用してきたからだ。高校二年生から進級時、いよいよ三年生クラスが軒を連ねるフロアに移動し、厳しい受験期を覚悟する。かつて青学の文系学部生は相模原キャンパスでの二年間を経て、青山キャンパスに移動した。渋谷を歩く三年生の姿はどこか大人びて、その顔立ちからは幼さが消えていたこ

とを思い出す。

ところがオンライン授業ではこの場所の移動がほぼ作れない。高校から大学に移っても、パソコンの画面が変化するにすぎない。ある一年生が言っていたが「まるで高校四年生」に進級しただけのようだ。

聖書の登場人物は見えない触れられない神と、「信仰」という名のインターネットで繋がった。しかしこの垂直のオンライン教育は静的なものではない。移動を命じ続ける神が人と共に進捗しつつ、双方向の関わりを展開するアクティブラーニングでもあった。

主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。(出エジプト記一三章二二節)

聖書の民にとつて神からの命令は常に「移動」とセット。それは天国へと歩み続ける「旅人」(ペトロの手紙一第二章一節)である人間にとつて至極当然なこと。人は学びながら移動する。いや、移動自体が学びなのだ。その重要な部分をオンライン授業のどこで補完できるのか、私の中でまだ答えが出ないでいる。